

日本道路建設業協会（増永修平会長）は、今後増加が予想されるICT土工の活用・普及に向けて、会員企業を技術的にバックアップする取り組みを進めている。29日に千葉県市川市の国道298号沿いで整備が進む「道の駅いちかわ」の現場見学会には、同協会会員技術者ら36



ICT舗装の安全・生産性確認

人が参加、熱心に質問するなど関心の高さがうかがえた。

見学会の工事名は「道路休憩施設舗装他工事」。国土交通省関東地方整備局首都国道事務所が発注、施工は大林道路が担当する。同日によるICT舗装の初弾工事となる。

工事では、大型車駐車場（7710平方メートル）の下層路盤15メートル

道建協

と上層路盤15メートル、小型車駐車場（2150平方メートル）の下層路盤20メートルがICT施工の対象になる。起工測量と路床盛土はICT土工、路盤工とアスファルト舗装工はICT舗装工の枠組みで工事を進める。

参加者は、大型車駐車場の上層路盤の敷き均し工事を見学会写真。マシンコントロール（M

大林道路工 道施 「道の駅いちかわ」で見学会

C）を搭載したグレーダーが、自動追尾型TS（トータルステーション）に制御されて走行する状況や、丁張りがなく、作業員の出入りが少ない現場では、機械との接触事故が減るなど、安全性が高いことを確認した。見学会に先立ち行われた説明会で、河原秀臣大林道路本店工事企画副部長は、「生産性と安全性を向上させることがICT舗装の目的と指摘する」とともに、測量に始まる工事の流れを解説した。

道の駅いちかわは、東京外かく環状道路（外環）の整備に伴い建設する。都市型をコンセプトに、メインとなる駐車場のほか、レストランやFM放送ブースが入る地域振興施設などで構成する。4月の開業に向けて工事が進む。

